

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 2 月 18 日現在

機関番号：34314

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23730847

研究課題名（和文） 美術科教育と生涯美術社会との接続に関する社会実験研究

研究課題名（英文） A Social Experimental Study about Connection between Fine-arts Education and Lifelong Learning Society of Fine-arts

研究代表者

竹内 晋平 (TAKEUCHI SHIMPEI)

佛敎大学・教育学部・講師

研究者番号：10552804

研究成果の概要（和文）：この社会実証研究には2つの目的がある。第1の目標は小規模・高品質の芸術の普及を促進するための条件を明確にすることであり、第2の目標は授業とワークショップを通じた児童による成人への効果を明確にすることである。2年間で行なわれた複数の予備社会実験に基づいて、児童からの成人への芸術発信を行うための図画工作科授業およびワークショップを公立小学校において実践した（本社会実験）。そして児童および成人による発話や記述、作品分析の結果等を通して芸術発信の効果を検証した。

研究成果の概要（英文）：This social experimental study has two aims. First aim is to clarify the conditions for facilitating the dissemination of small-scale and high-quality arts. And second aim is to clarify the emotional process and effects of fine arts activities in which artists taught children and children taught other adults through lessons and workshops. On the basis of preliminary practices, fine-arts lessons and workshops for disseminating arts to adults from children were conducted in an elementary school. As a result of considering the descriptions provided by children and adults, the effects concerning the dissemination of arts were clarified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	400,000	120,000	520,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：美術科教育，生涯学習，社会実験研究

1. 研究開始当初の背景

内閣府によって行われた「生涯学習に関する世論調査」（2005）および「文化に関する世論調査」（2003）は、スポーツや音楽と比べると、成人の日常生活の中で美術の存在が希薄となる傾向を示している。本来は、‘芸術文化の振興’という行為は、政策として行われるというよりも自然発生的な要求によって成立すべきものではないだろうか。しかし、現代の日本においては芸術文化に関する活動が継続的に発展し続けるためには、一般成人に対する意図的な芸術発信が必要とな

る状況が認められると考えられる。

昨今の美術科教育をめぐっては、2008年1月の中央教育審議会・答申において「生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐくむことなどを重視する」という内容が記述されている。この記述からは、児童・生徒が義務教育終了後に芸術との関わりを持ち続ける生涯美術学習社会を具現するための基礎的な資質を義務教育段階で育もうとする姿勢を読み取ることができる。

つまり、‘作品づくり’によって完結する

美術科教育ではなく、義務教育終了後の生涯美術学習を見通した美術科教育を展開することによって、美術の社会化を図るという考え方である。

以上から本研究では、昨今の日本において、継続的に芸術が発展するためにも、一般成人に向けた発信が不可欠であると考えた点が研究の背景となっている。

2. 研究の目的

本研究は、前述のとおり一般成人に向けて芸術発信を行う必要性に基づき、美術科教育における‘子どもの学び’から日本美術を視点として情報発信し、美術が社会化するプロセスを明らかにすることを目的とした。

成人から子どもに対する教育活動に終始するのではなく、本研究は‘子どもが感じた芸術に対する感受’を積極的に一般成人に対して情報発信することを意図するものである。

3. 研究の方法

本研究は、学校教育における‘子どもの学び’から日本美術を視点として情報発信し、芸術を社会化させる過程を明らかにすることを目的としている。成人から子どもに対する教育活動という一方向に終始するのではなく、‘子どもの芸術に対する感受の内容’を積極的に一般成人に向けて情報発信することによって芸術の社会化を具現化することを意図するものである。

このため本研究は、(1)芸術と市民をめぐる諸問題についての予備的な考察、(2)予備社会実験の枠組みと予備社会実験の結果分析、(3)本社会実験において実践した図画工作科授業・ワークショップを通じた芸術発信についての分析、という3段階を経て推進するものとする。表1に示しているのは、本研究を推進した2年間に実施した2件の予備社会実験および1件の本社会実験の概要である。

表1 本研究において実践した社会実験の概要

	実践期間	授業実践	情報発信の方法
予備実験 A	2011年 10月14日 ～11月19日	京都府内小学校 6年生・水墨画題材 「黒と白とで あざやかに」	京都府内の寺院で ワークショップを 実施 (参加者なし)
予備実験 B	2011年 11月7日 ～11月19日	京都府内小学校 5年生・水墨画題材 「黒と白とで あざやかに」	京都府内の寺院で ワークショップを 実施 (9組参加)
本実験	2012年 6月13日 ～6月30日	京都府内小学校 3年生・水墨画題材 「黒と白とで あざやかに」	小学校「土曜塾」で ワークショップを 実施 (17組参加)

4. 研究成果

(1)予備社会実験と本社会実験の関係

2件の予備社会実験を通して得られた仮説は以下の通りである。

- ・ 図画工作科学習・水墨画題材では、墨の濃淡や筆への含ませ方、運筆などをアーティスト（ゲストティーチャー）から指導を受ける際にオノマトペを活用することによって、専門的な見地からの感受が児童に伝達されやすいのではないかと。
- ・ 情報発信の場としてのワークショップを開催する場合、ワークショップ参加者の居住地からの距離が隔たっている場合は参加が困難となるが、参加者の生活圏での開催では、一定の参加者数が見込まれるのではないかと。
- ・ 保護者の立場からは、ワークショップ参加者の募集が小学校が窓口となって行われることによって、参加への動機が高まる傾向があるのではないかと。

これらの仮説をもとにして、本実験で扱う‘子どもの感受の内容を通じた芸術発信’の範囲を図1に赤線で示した。本社会実験におけるこの範囲設定は、予備社会実験での経験を踏まえ‘アーティストから子ども’‘子どもから保護者・地域住民’という感受の内容の経路を意識し、ワークショップを介して学校教育と生涯学習とが接点をもつようにすることを意図したものである。このような芸術発信は範囲が狭く、直接的に感受を伝えることができる対象も少数であるが、地域的コミュニティにおける美術的活動の質を保障することにつながるかと考えている。

なお、図中にコーディネーターとして位置づけているのは、学校教育と地域的コミュニティ、アーティスト等との間を調整する役割であり、筆者がこれを担っている。次節においては、概念図に示した芸術発信を実証するために実践した本社会実験について報告する。

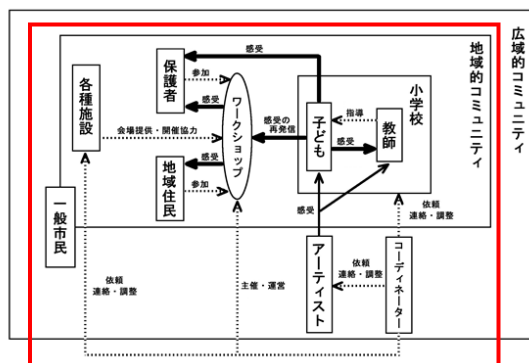


図1 本社会実験で扱う芸術発信の範囲

(2) 本社会実践の経過と成果

① 3年生における図画工作科授業

前述した2件の予備社会実験において扱った題材「黒と白とで あざやかに」を3年生向けに若干の調整を加えて指導しているため、ここでは指導の概要を示す。

- ・ 第1次：明治初期に制作された5種類の「玉泉絵手本」（望月玉泉）を鑑賞し、児童が選んだものをもとにして墨と筆での臨画に挑戦する（計3時間）。
- ・ 第2次：前時に行った臨画の活動をふり返り、うまくいかなかったところや難しかったところをゲストティーチャーに実演を見せていただきながら、墨と筆の技法を学ぶ（計2時間）。
- ・ 第3次：ゲストティーチャーから学んだことを生かして、さらに同じ絵手本や他の絵手本で臨画を行ったり、具体物を墨と筆で描いたりする（計2時間）

第1次で3年生児童は初めて目にする絵手本に大変興味をもっている様子であった。筆と墨によって描かれた5種類の絵手本は色彩が豊かではないが、児童は黒と白の濃淡やにじみ・かすれによって鮮やかさを感じていた。第1次の指導を行った時期（2012年6月）は、国語科・書写において毛筆学習が始まった直後でもあったため、3年生児童は筆で絵を描くことに対する高い意欲をもっているように見受けられた。

実際に絵手本を見ながら臨画の活動を始めると、3年生児童からは、濃淡の調節が難しい、子犬の感じをどのように描くのか、細い線が描けない、線がにじんでしまう、どのような順序で描かれたのかわからない、という内容の声が聞かれた。指導者から今回の授業にゲストティーチャーに来ていただくこと、児童の前で同じ絵手本をもとに描いていただくことを知らせ、第1次を終えた。

第2次では、これまでの実践（第Ⅲ章を参照）から協力していただいているゲストティーチャーに来ていただき、指導と実演をしていただいた。授業の冒頭では、ゲストティーチャーの全体指導により、筆で細い線を描くための技法について説明がなされた。その際、ゲストティーチャーは、書画カメラによる手元・筆先の演示を行った。

その後、児童が選んだ絵手本ごとのグループを構成し、ゲストティーチャーによる描画の実演が行われた。この実演や個別指導においては、予備社会実験における仮説を踏まえた事前の打ち合わせに基づき、下記のようにオノマトペを積極的に活用した指導がなされた。

- ・ 「ここは筆をニヨン、ニヨンと（キノコの軸部分の描き方を指導する場面）」

- ・ 「先をスッと置いて、グッと押す（カエデの葉の描き方を指導する場面）」
- ・ 「ガーッと置いておいて、最後だけピュッとやると、ヒゲみたいな根（蕪菁の胴から根の先にかけての描き方を指導する場面）」

このようなオノマトペを伴った指導方法に対して、児童は事後の感想文に「いろんなことを教えてくれた。楽しかった。ドンピュッとやった。前のとちがいがすごかった。うまくかけた（蕪菁を描いた児童）」と記述している。

第3次においては、自力での表現活動を行った。どの児童も自身の上達を実感しながら集中して最後の描画活動を行っていた。ここでも児童は、「（子犬の毛の）パサパサした所が難しかったけどがんばったらできて、ほんものの見本の犬みたいな犬をかけてうれしかったです（子犬を描いた児童）」と記している。

② 保護者への芸術発信を意図した親子ワークショップ

授業実践を終えた段階で、小学校の児童・保護者に水墨画ワークショップへの参加を呼びかけた。ワークショップ当日（2012年6月）の参加者は、全17組（児童21名、保護者17名、幼児1名、計39名）あり、そのうち、3年生からの参加は8組あった。ワークショップ後に保護者を対象として行ったアンケート調査（実施方法：記名式・自由記述により行い、後日回収／回収率：52.9%、17名中9名を回収）によると、ワークショップへの参加動機の内訳は、「子どもが参加を希望したため（5名）」、「子どもにこのような経験をさせたかったため（2名）」、「保護者自身が関心をもったため（1名）」、「学校からの案内であったため（1名）」という結果であった。この回答からは、参加した保護者の属性として、特に美術への関心が高い層に偏っているものではないことを確認することができる。

このワークショップでは、前項で述べた図画工作授業と比較してゲストティーチャーによる指導は抑制し、とりわけ3年生の親子に関しては「子どもが保護者に感受の内容を伝えること」を重視した。描画を通じた表現活動を進める際は、親子が隣り合わせに座ることで感受の内容の交流が発生しやすくなることを意図した着座方法とした。この結果、3年生児童は授業の中でゲストティーチャーから得た感受を想起し、保護者に運筆方法や濃淡の使い分けについて伝えたり、保護者との自然発生的な相互鑑賞を行ったりすることを通して、感受の内容を共有しながら親子での表現活動を進める姿が見られた。このような表現活動を45分間ほど行い、アンケート調査（前述）により、「子どもが美術を

楽しんでいる姿を見たり、子どもから美術の楽しさについて伝えられたりして、(保護者の)美術に対する印象は変わったか」という質問を行った。以下はその回答の一部である。

- ・ 「子どもの迷いのない筆づかいが、大人はうらやましく思いました(3年生保護者)」
- ・ 「『美術』と聞くとかたい、難しい印象がありますが、子どもを通して知ることにより、より身近に感じることができました(3年生保護者)」

上記の「迷いのない筆づかい」という回答からは、ゲストティーチャーが授業の中で意図的に行っていたオノマトペを活用した指導を行っていたことが影響していることを読み取ることができる。また、美術を「子どもを通して知ることにより、より身近に感じることができました」という回答からは、今回のワークショップには保護者が子どもの姿にふれることで、気軽に楽しむことも美術的活動に含まれていることに気づくことを促す効果があったと推察される。

また、全回答(9名、前頁に示した回答の一部を含む)のテキストマイニングからも同様の傾向を読み取ることができた。図2は保護者対象のアンケート調査における質問「子どもが美術を楽しんでいる姿を見たり、子どもから美術の楽しさについて伝えられたりして、美術に対する印象は変わったか」に対する自由記述をテキストマイニングソフト(IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0)によって視覚化した保護者の回答の傾向である(図2における円の大きさは語の頻度の高さを、円とつながる線の太さは関連性の高さを表している。図内の位置・距離関係は特に意味をもっていない)。「親」を始点として頻度の高い線(太い線)をたどると、「親-子ども-美術」または「親-絵-子ども-美術」という傾向をみることができる。そして、「美術」からは「美術-もの」「美術-楽しかった」「美術-身近」「美術-感じる」「美術-思う」という肯定的な語が比較的多く関連していることも読み取ることができる。この分析結果からも、保護者がワークショップに参加することで、自身が美術的活動を行うことに対して肯定感を得たことを推察される。

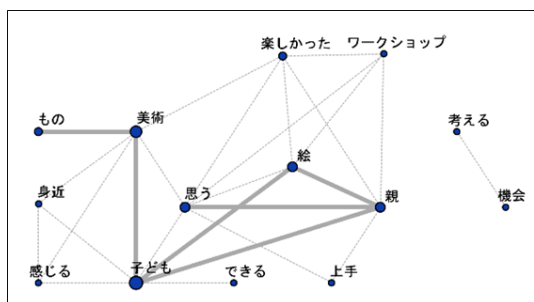


図2 保護者の自由記述にみられる美術に対する印象 (3)総括

ここまで、芸術発信のうち地域的コミュニティの中で保護者を対象の中心(3年生児童のきょうだいや他学年の児童を含む)とした発信の効果を実証する実践を行ってきた。

本研究における成果は以下の2点である。1点目として、これまで予備社会実験で得た仮説を本社会実験によって実証することができた点をあげることができる(アーティストを始点として感受の内容をオノマトペの活用によって伝達することの効果、対象者の近隣地域でワークショップを開催することの効果、小学校の協力による広報の効果)。今回のような小規模の地域における芸術発信であれば、これら実証された知見に基づいて実践することによって効果があがる可能性が高い。2点目は、「アーティストから子ども」そして「子どもから保護者等」という感受の内容が伝達される様子を児童の記述、保護者のアンケートによって具体的に確認することができた点である。

今後は、本実験で扱った芸術発信がイベント性の高いもので終わることなく、小規模であっても多くの小学校・地域的コミュニティで展開されることによって、市民の日常生活や生涯学習の中に美術的活動が浸透することを期待する。この点はこれからの芸術発信に関する課題とも関連している。課題の焦点は、今回のような芸術発信をどのようにして「広域的コミュニティ」に広げていくのかという点である。このため、教員養成や教員研修等の場において芸術発信の趣旨を啓発することを通して、今後の美術科教育に新たな社会的意義を創出していきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- (1) 竹内晋平, 造形活動における児童の感受を通した芸術発信 II, 大学美術教育学会誌, 査読有, 第45号, 2013(掲載決定済・印刷中)
- (2) 竹内晋平, 日本美術の教材化による芸術の社会化(I) —方法論を確立するための史的 연구—, 美(京都市立芸術大学美術教育研究会 研究誌), 第187号, 査読無, 2012, pp. 56-67
- (3) 竹内晋平, 造形活動における児童の感受を通した芸術発信 I, 大学美術教育学会誌, 査読有, 第44号, 2012, pp. 279-286
- (4) 竹内晋平, 生涯美術社会との接点を意図した美術科教育の展開, 佛教大学教育学部論集, 査読無, 第23号, 2012, pp. 9-17

http://archives.bukkyo-u.ac.jp/infolib/user_contents/repository_txt_pdfs/kyoiku23/K023L009.pdf

〔学会発表〕（計 3 件）

(1) Shimpei Takeuchi, Transmission of Fine Arts from a Children's Lesson to a Wider Society: Workshops at Buddhist Temple as a Bridge between School Lessons and Lifelong Learning, InSEA 2012 European Regional Conference (Limassol, Cyprus), 2012. 6. 27

(2) 竹内晋平, 子どもの造形活動を通じた芸術発信, 第 34 回美術科教育学会新潟大会 (新潟大学), 2012. 3. 28

(3) 竹内晋平, 生涯学習社会を見通した美術科教育の新たな展開 —美的感覚の育成を中心に—, 日本教育実践学会第 14 回研究大会 (佛教大学), 2011. 11. 5

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹内 晋平 (TAKEUCHI SHIMPEI)

佛教大学・教育学部・講師

研究者番号: 10552804